



第6回 伝説の編集人

週刊新潮の原型をつくった男

文 森 功

text by Isao Mori

新聞社の専売特許といわれたジャーナリズムの世界に挑んだ齋藤十一は、文学の素養のある読売新聞の村尾清一を新潮社に引き入れようとする。誘いを受けた村尾はその頃、社会部記者として第一線で取材に走りまわりながら、達人な文章を書いていた。すでに村尾の名文家ぶりは、新聞の世界だけでなく、出版界にも轟いていた。小説『三保の松原』が文芸誌『新潮』で入選したのも不思議はない。

「小説『三保の松原』は週刊新潮の創刊よりだいぶ前に書いたものでした。それが齋藤さんの目に留まって入賞し、『ひと月に一度、何らかの事件をとりあげて新潮に書いてくれないか』と野平（健一・二代目週刊新潮編集長）を通じて言われたんです。新潮は小説ばかりで、他の文章といっても、作家のコラムくらい。そこで齋藤十一

さんが新潮に『新潮雑談』という欄を設け、新聞に載せるような事件の批評を書かせようとした。それを引き受けることになったのです。僕と朝日の佐々（克明）君、あともう一人いたと思いますが、持ちまわりでそれを十年くらい続けました」

朝日の佐々は警察官僚の佐々淳行の実兄である。新潮に寄稿した記憶に残っているコラムには、どんな記事があるか、村尾自身に尋ねた。

「僕は昭和二十八（一九五三）年に中東特派員としてカイロに赴任したのですが、その年の六月にロンドンでエリザベス女王の戴冠式があった。それで僕はモロッコ経由でカイロに行く途中、ロンドンに寄って戴冠式のことを書きました。その頃は外国に行くのが珍しい時代でしたから、重宝がられました。」

報を放ったのは焼津の通信員の安部光恭でした」

通信員は新聞社や通信社が地方の支局活動をサポートするため、地元の住民を雇う契約社員だ。普段、酒屋やタバコ屋などの仕事をもちながら新聞社を手伝うパターンも少なくなかった。安部はまだ二十三歳。伊東市の仏光寺という寺に生まれ、支局員ですらなかった。村尾が続ける。

「今でいう派遣社員のようなものです。年に一本原稿が届くかどうかという記者で、たまたま下宿先の親戚がマグロ船の関係者だったので、第一報が入ったのです。原発実験で被ばくしたという六行くらいの短い記事を送ってきた。トクダネとはそういうもので、運というほかありません。それを見た僕と辻本デスクとが、これは大変なことが起きた、と三月十六日にデカデカと報じたのです」

これが世界的なスクープ記事となる。折しも、出版界ではこの前年にあたる一九五二年に日本文学振興会主宰の菊池寛賞が復活し、

受賞対象が文芸以外の分野にも広がられた。その五年の第三回菊池寛賞に、「世界的ニュース『ビキニの灰』のスクープ」の安部光恭が輝いている。

「菊池寛賞は読売と朝日が第一回と第二回にもらっていたので、第三回は毎日だろうといわれていたのですが、読売のビキニの灰でスクープをやったもんだから、読売にやらざるをえないとなったみたい。といっても読売新聞という組織の受賞だと困るから個人へ授与したい、と連絡が来て、社内ではデスクの辻本が僕のどちらかに与えよう、となっていたのですが、二人で相談した。その結果、僕らではなく安部光恭がいちばんいい、と決めて文藝春秋側（文学振興会）に伝えました」

特ダネを飛ばした安部はおかげで読売新聞本社の社員記者となり、政治部に配属された。だが、しばらく務めたあと、辞めてしまし、仏光寺の住職になったという。むろん読売のスクープは通信員の報告を拾いあげ、「死の灰」と

したね」

村尾といえ、なににより一九五四（昭和二十九）年三月に起きた第五福竜丸事件だろう。太平洋に浮かぶマーシャル諸島近郊で漁をしていた遠洋マグロ漁船第五福竜丸の乗組員二十三人が、米軍がビキニ環礁でおこなった水素爆弾実験の死の灰を浴びて被爆した。船の無線長だった久保山愛吉が半年後に死亡した。村尾にとっては忘れられない事件である。破顔しながら振り返った。

「僕ら読売の社会部で昭和二十九年の初めから原水爆と原子力発電について書いた『ついに太陽をとらえた』という連載をやっていた。たまたまそれが終わったときに事件が起きたのです。このとき僕は遊軍記者で、デスクが辻本芳雄、社会部長の原四郎が連載のタイトルをつけたんだけど、事件の第一

名付けた村尾のセンスがあればこそだ。齋藤は、ときにフランス人夫婦の悲恋物語を描き、こんな世界的な特ダネを飛ばしてきた村尾に感服した。そうして新潮のコラム欄を任せた。村尾が言葉を加えた。

「僕はもちろんそこにビキニの灰のことも書きました。『新潮雑談』の窓口は野平で、『齋藤十一は人に会うのを嫌うから、電話で話してくれ』と言われました。齋藤さんからは『今度、新潮雑談というのをやるから、きみ書いてくれなかね』とひと言それだけ。齋藤さんは独特な感性をお持ちの人でした」

つまり、文芸誌の新潮で齋藤の始めた時事コラム「新潮雑談」がのちの週刊新潮の原型となる。そこから週刊新潮へと時事問題の記事が引き継がれ、新潮ジャーナリズムが形づくられていった。齋藤は、それも文学の一つのあり様だととらえていた。

（敬称略）



Profile

福岡県生まれ。新聞社、出版社勤務を経て2003年よりフリーランスのノンフィクション作家に転身。08年、09年2年連続「編集者が選ぶ雑誌ジャーナリズム賞作品賞」、2018年『悪だくみ』（文藝春秋）が「大宅壮一ノンフィクション賞」受賞。『許永中』『同和と銀行』（講談+a文庫）など著書多数、最新刊は『ならずもの』（講談社）